

特別講演

私の臨床研究
－新潟大学から明倫短期大学に繋ぐ－

野村 章子

(明倫短期大学 歯科技工士学科 教授)

臨床研究が医療における疾病の予防や診断および治療方法の改善，疾病原因と病態の理解ならびに患者のQOLの向上のために実施されるものであることは周知の通りです。私は歯科医師として臨床に密着した疑問を解決する臨床研究を心がけてきました。新潟大学歯学部歯科補綴学第一講座（現在の顎顔面再建学講座摂食機能再建学分野）に所属していました20数年間に，大学内外の多くの研究者の支援があって積み上げることができました臨床研究の変遷を，平成15年度明倫短期大学学術大会の特別講演で紹介させていただきました。

私が歯学部を卒業して入局した当時の歯科補綴学第一講座では，下顎運動，筋電図，咬合器の各研究グループが立ち上がっていました。私はその中の下顎運動班に所属しましたので，先輩のお手伝いから研究生活が自然に始まりました。もちろん入局の動機は補綴治療のスキルアップでしたので，研究への情熱は診療や教育に比べればそれほどでもなく，数年後に文部教官助手の辞令をもらってから大学人としての業務が教育，診療に研究も加わった3本柱であることをようやく自覚した次第でありました。

最初の学会発表は第4回顎関節研究会における「顎関節音を伴う顎関節症患者の治療例－顎関節音と下顎の三次元運動との同時測定による検討－1983」で，共同発表者の多大な支援によるものでした。当時の歯科補綴学領域では，国の内外を問わず顎機能分析が活発な研究テーマの一つであり，私もその雰囲気の中で新たに「電磁界による下顎頭動態記録装置の開発」に携わり，これが1990年に学位論文となりました。

その後学位取得を契機に，顎機能を測定する機器の開発にはとどまらず，日々遭遇する症例の診断や治療効果の判定に役立つものや，学生教育に関連するものへと研究対象が広がりました。例えば「咬合挙上を伴う咬合再構築－その治療法と顎口腔機能的評価－1992」および「部分無歯症を合併した唇顎口蓋裂患者

に対する咬合挙上を伴う補綴的および外科的矯正治療1998」では，3次元6自由度システムと筋電図分析を治療後の評価に応用しました。また「歯学部と附属歯科技工士学校における共同教育プログラムの導入とその教育的効果－歯学部学生へのアンケート調査から評価する－1999」では，新潟大学歯学部附属病院での体験実習という特色のある教育についてまとめました。

この頃から，「Saliva and oral health, BDJ, 1996」の翻訳に携わったこともあって，顎機能から口腔機能へと視点を変えて補綴治療や咬合再建について評価するテーマに関心が高まりました。

さらに，文部省（当時）から科学研究費補助金を獲得するためには，高齢者や摂食・嚥下障害者を研究対象にすることが必要でした。「刺激唾液分泌速度からみた義歯による咬合支持の効果について1997」「産学連携による口腔機能改善用食品の開発－食品咬断率測定用ゼリーの検討－2000」「口底がん切除と放射線治療を受けた1症例における摂食・嚥下リハビリテーションの効果2002」では，唾液分泌機能や咀嚼能率，さらに食品のテクスチャーが主なキーワードとなりました。以上の主な研究活動は私自身の臨床の場で進めてきたものでありますので，EBMとは公言できなくとも患者さんの治療に対する満足度には貢献したものと考えております。

さて，平成15年1月より明倫短期大学に赴任し，前任地とは異なる研究環境になりましたが，野村研究室プレゼンテーションの開催8回，日本歯科技工学会や歯科衛生士専任教員秋期学術研修会での共同発表，産学交流フェア-inにいがたの展示発表などから，新たな方向に一步踏み出したと思っております。研究活動においても停滞なく過ごせましたことは，明倫短期大学の皆様のご支援によるものと感謝しております。この講演でご紹介しました臨床研究が，本学の今後の研究活動の一助となりましたら幸いです。